

トルファン将来木版刷梵文雜阿含經断簡

— R・ピシエル公表梵文断簡について —

細 田 典 明

一 問題の所在

近年の梵文阿含經に関する研究は長足の進歩を遂げているが、一九〇四年にピシエルが公表した四種の木版刷梵文断簡 (Blockdruck Grfwedel I-IV, 「断簡 I-N」) はその発端となつたものである。断簡 I の写真にはその左端に漢字で「雜阿含五卷一百五十八上」と漢字で記載されていることから、シルヴァン・レヴィ^③がいち早く漢訳雜阿含經との比定を行ない、日本でも渡辺海旭^④・岡教遂^⑤・椎尾辨匡^⑥・赤沼智善^⑦・山田龍城等の諸氏によって漢訳・パーリとの比定がなされたが、漢訳との比定には問題を残した。その後、『トルファン出土梵文写本目録』 (『トルファン目録』と略) が公刊され、第一巻と第五巻にこれらの断簡が扱われ、特に断簡 II ~ IV についてより精緻な検討が加えられたが、なお検討の余地がある。

また、これまで断簡 I の写真は第一五八葉表・裏と第一七

三葉裏しか公表されていなかったが、今回、断簡 I の全体のコピーを入手することが出来たので、従来疑問視されていた点を明らかにし、「雜阿含五卷」という巻表記等、雜阿含經組織復原研究にいわば物的証拠としての資料を提示したい。

ちなみに、最近ギメ博物館から中阿含第一三三經「優婆離經」の木版刷梵文断簡一葉が発見され、中谷英明氏によって研究が写真とともに公刊された。この断簡は断簡 I に酷似しており、裏面右端に「中阿含三卷八十九下」と漢字で記載され、同様の蓮華文様を両面に有している。この断簡の存在により、四阿含全体にわたって梵文阿含經が木版印刷されていたことが推測され、断簡 I を検討する上でも貴重な資料である。

二 断簡 I・II (Kat. -Nrn. 612, 1174)

断簡 I は第一五七葉が右端のみ、第一五八葉から第一七三

断簡Ⅱと断簡Ⅰ（第157葉）

葉は左側の部分が現存し、宋訳雜阿含第九六七經「俱伽那經」から第九七二經「三諦經」に対応する。一方、断簡Ⅱはビシユルによれば三枚の小断片からなるが、従来その一部が「俱伽那經」の直前の「富隣尼經」に対応することが日本の先学によって指摘されながらも、全体に一致を見い出すことが出来なかったのは、ビシユルがこの三枚の断片の順序・表裏をあくまで推測^①で I ab, II ab, III ab と決めたテキストを、日本の諸論考ではそのまま載録した点に起因している。

その後、『トルファン目録』第五巻において、これらの小断片が正しくつなぎ合わされ、写真とともに公表されたが、

漢訳との比定がなされていなかったため、以前からこの断簡は断簡Ⅰの最初、すなわち第一五七葉に属すべく、正しく復原されることを痛感していた旨ベッヒェルト教授に伝え、断簡Ⅰの白黒反転写真のコピーを入手するに至った。これによって、断簡Ⅱと第一五七葉について次のように復原出来る。さらに、断簡全体のコピーを見ることによって、

- ・ 雜阿含の「雜」の字体
 - ・ 「五卷」という巻表記
 - ・ 第一七三葉の蓮華文様の扱い
- について明らかとなったので、この三点について述べる。

[dī] tvā yena Bhagavāṁs tenopa (jagāma upetya Bhaga) [va] tpa-⁽²⁾ vāsyābh [ūt] s(ambha) [h] (u) lair anyatṛṭhikapa [rī] (vrājakaṁ sārḍham antarāka) thā- evam cāha kaccid aham bhadanta (evam vyā) kurvāno no ca [bh] d[ī] ca dharmasya cānuddharmaṁ vyākāromi na ca me kaści(d āga)c(ch)e(t) ā no ca mān abhyācaksase nāṁsarasy uktavādi ca	buddha bhāṣitah 100 50 7
[v] ādānuvādāṁ garhashāṇīyo dharmah / tat kasmād dhetoh Pū[r] ti saḥ yātānś cāmitrakulajātā guḍaguṇijī[(ā)tā kaṁ sa[n] (dh) āvaniti saṁsaravanti saṁ[s]ā(y ativartta[m] te mi[h] [na] m ga[c] chet sarvasyāḥ prajāyā dī[r] (garātram arbhāya hitāya) vāpe athāyusmān Ānanda(h) yena	雜阿含 五卷 十七下 一百

1 「雜」の字体

前述のとおり、ピシエルによって公表された断簡Ⅰの表面の写真は第一五八葉のみで、この「雜」の字体について、つくりの部分が「隹」よりも「斤」に似ていることから「新阿含」と読む意見もあつたが、他の葉における字体を見れば「雜」と読んで全く問題はない。なお、へんの部分も「束」に見るが、「卷」が時に「巳」と略字体を用いているように、漢数字以外はかなり略字を使う傾向にある。

2 「五卷」という巻表記

宋訳雜阿含經の対応部分は丁度第三十四卷から第三十五卷にまたがっているが、断簡Ⅰはすべて「雜阿含五卷」と表記されている。これは、この断簡の「卷」が現行漢訳の巻を意味するものではなく、品を意味するものではないかと考えられる。

そこで、断簡全体が漢訳相應箇所何頁分にあたるかを返り点・注番号など本文に搜入のない高麗本を基準にして測り、そこから断簡の失われた第一葉が現行漢訳のどのあたりにくるかを概算すると、ほぼ第三十一卷あたりに来ることになる。しかし、現行漢訳は卷組織が乱れているため、これまでの諸復原案を参照すると、共通して第三十二卷の前には第四十一卷が置かれ、その後半から「仏所説(品)」に相應する経が始まる。このことから、断簡Ⅰ・Ⅱは本来、雜阿含第五

卷(品の意)「仏所説(品)」の一部であるという推定が可能である。

さらに興味深いのは、断簡裏面左端上部(あるいは表面右端上部)に 'buddha-bhasitah' と記載されている点である。これは、単にピシエルの言うように「仏説○○經」と言う場合の「仏説」という形容語と解すべきではなく、「仏所説(品)」の原語が 'buddha-bhasitah' であることを意味している。このことは、前述の中阿含断簡について、表面右端上部に、同様に 'sagṛaka' と記載され、「小品」を意味していることから類推され、これらの木版刷阿含經は、書式上、表面右端上部と裏面左端上部に品名を梵語で記載しているのである。

「仏語品」あるいは「仏品」を雜阿含の品立ての上で第五番目に置くことは、『根本説一切有部毘奈耶雜事』第三十九卷・第四十卷に知られるが、一方、雜阿含第二十四卷冒頭にある「第五誦道品第一」という現行漢訳に辛うじて残っている品立てと矛盾する。また、雜阿含經の伝承が単一ではないことも問題を複雑にしている。本稿では雜阿含組織復原研究に対して、雜阿含の品組織について梵文資料を提供するにとどめ、今後の研究に委ねることにする。

3 蓮華文様の扱い

第一七三葉中央部に存する蓮華文様は両面にあることが入

手したコピーから知られ、ピシエルはこれを經典を綴じる糸を通すための綴じ穴にあたる蓮華文様と説明し、『トルファン目録』の写本記事もこれを踏襲しているが、実際にこの文様の中心に穴が開けられた形跡はなく、表と裏を重ねた本来の状態で二つの文様の位置を確認すると、両者の間で数センチのずれが生じ、綴じ穴と解することは不可能である。綴じ穴でなければこの文様が他の断簡の各葉毎にその中央部に刷られる必要はなく、断簡Ⅱが第一五七葉に属するうえで、中央に蓮華文様がなくとも問題にはならない。なお、中阿含の断簡の両面に存する蓮華文様はかなり左寄り(左一対右三)の位置にある。

III 断簡Ⅲ (Kat.-Nr. 613)

断簡Ⅲは両端が欠損した一葉のみの断簡で、裏面第一行目に経名のウッダーナ(uddana)があり、それを基準に漢訳と対照すると、表面が雜阿含第八三二經「戒經」、裏面第二行目以降が同第八三二經「三字經」に比定される。『アングッタラ・ニカーヤ』と漢訳では經の順序がほぼ逆で、パーリを基準にしたピシエルは断簡の表裏を逆している。椎尾博士は荻原博士の考証に基づき表裏を正しているが、ウッダーナの重要性に着目した日本の研究は皆無で、また、漢訳との対照も「戒經」では省略が多く先行する「崩伽闍經」等によって

補われなくてはならないにせよ、漢訳との正確な比定が行なわれたのは『トルファン目録』においてである。

なお、ウッダーナによる経名と漢訳の経順を比較すると、第八二七經「耕磨經」と第八二八經「驢經」との間にウッダーナでは二經介在しており、「戒經」までを「ま」とまりとする点も含めて雜阿含組織復原研究の經單位の考察の一助になるかと思われる。

ピシエルはこの断簡について、断簡Ⅰ・Ⅱとは字体も異なり、字間も広くとってあることから、独立した断簡であるとするが、ほぼ原寸大の両者の写真を比べると、五行どりの文字列の天地に引かれた線の間隔は両者とも一〇・五センチ程で、失われた部分の梵文を可能な箇所について回復すると、両者とも五〇数シラブルと、かなりの書式上の共通点を見出すことが出来る。この断簡は戦争による疎開後の混乱で実物が発見されていないので、実物によって両者を比較することは現在不可能であるが、類似的の木版刷断簡と考えられる。

四 断簡Ⅳ (Kat.-Nr. 614)

断簡Ⅳは二葉の断片からなり、四念処のうち心念処・法念処と四正断の冒頭にあたる梵文を含むが、断簡Ⅰ・Ⅲとは独立した断簡であり、これを阿含經の一部にみなす根拠は全くない。従来、雜阿含第八一三經「金毘羅經」等に比定した日

本での研究は、この断簡が阿含經の一部であるという作業仮説に基づき、その上で四念処を説く阿含經(特に雜阿含)に比定しようとしたに過ぎない。また、ピシユルはこの二葉の断簡を本来一葉のものとしてつなぎ合わせてテキストにしたため、梵文が支離滅裂になったことも混乱の原因となった。

『トルファン目録』では梵文が正しく改められたが、この断簡が各面五行を有し、二葉目表面第一―二行、裏面第四―五行が欠損しているとする点は疑問である。類似の文を有する『トルファン目録』第五卷の断片(Kat.-Nr. 1180, Bx-z, A¹⁻³の順)を参照⁽²³⁾ Blatt a) から b) にかけて失われた梵文を【】内に示すと、百十数シラブル程の文が欠損部分に充当し、この断簡の十二乃至十四行分、すなわち Blatt a) 裏面は下五〜六行、Blatt b) 表面は上七〜八行が欠損していると思われる。これは Blatt a) V⁵ の 'th' の文字が半分欠損

していることから知られる。

なお、図版からは読むことが出来ないが、ピシユルによれば、この断簡の余白に「十三」とよめる数字が中央アジア文字で記入されており、これを『トルファン目録』では葉番号ではないかと解すが、例えば『アルタ・ヴィニシュチャヤ・ストトラ』では四念処が第十三番目の法数にあたることから、この数字を四念処の法数番号を控えたものと解し、この断簡は一種の「法数マニユル」の一部であると考えられる⁽²⁴⁾。

以上、ピシユル公表の梵文断簡について、これまでの研究成果をふまえ、新たな知見を加えるとともに、雜阿含組織復原研究に資料を提供するという立場から検討した次第である。

断簡Ⅳ復原梵文

(adhyātmam citte cittānupāsāyī) [Blatt a) V¹] viharati ātāpi smṛ [V²] timāṁ saṃprajāna viniyāna [V³] bhiddhā [l] o [k] e daur [manasyaṁ] [V⁴] bahirdhā citte adhy[ā]ma [ba] [V⁵] hīrdhā citte cittānupāsāyī [R¹] viharati ātāpi [sm] [t] [R²] mān saṃprajāna viniyāna[R³] dhvā loke daurmanasyam=i[R⁴] dam=ucyate citte cittānup[ā]sāyānasmṛtyupac(s)th(ā) [na [Bx] m || dharmesu dharmānupāsānasmṛtyupacānaṁ.....ādhy[ā]tmam dharmesu dharmānupāsāyī viharati ātāpi smṛtimān saṃprajāna viniyābhiddhā [Bz] loke daurmanasyaṁ bahirdhā dharmeṣv adhyātmabāhirdhā dharmeṣu dharmānupāsāyī viharati ā[ā]tāpi smṛtimān saṃprajāna viniyābhiddhā loke daurmanasyam i [Blatt b) V³] dam=ucyate [A²] dha rmesu dharm[ā] [V⁴] [nupāsānasmṛtyu] [u] pas [th] ā [V⁵] nam || ca[ā] vā [r] i sa [m] yakpra [R] h [ā] ṇ [ā] ni / katama [A³] ni caivā [R²] r i iha bhikṣur=uṇṇa [R³] [nā] ṇ pāpakanāma=akusā [ānān] dharmānān)

- 1 ad BG I - II R. Pischel: Bruchstücke des Sanskritkanons der Buddhisten aus Idykušari, Chinesisch-Turkestan. *SB4 W*, 1904, SS. 808-827 mit Tafeln VI-VIII.
ad BG III-IV R. Pischel: Neue Bruchstücke des Sanskritkanons der Buddhisten aus Idykušari, Chinesisch-Turkestan. a. a. O., 1904, SS. 1138-1145 mit Tafeln X-XII.
- 2 Pischel, a. a. O., Tafel VI. 本注の書に扉を掲載。
- 3 Le Saṃyuktāgama sanscrit et les feuillets Grünwedel. *T'oung Pao*, Série II, Vol. V, 1904, pp. 297-309.
- 4 「新発見の阿含諸經の梵文」『壹月全集』上(大東出版社、昭和八年)、五六四頁(初出『新仏教』第十卷二号、明治四十二年)。
- 5 「梵語の阿含經と漢訳原本の考察」『哲学雑誌』第一八二号、昭和二年、三四五頁—三四四頁。
- 6 「雜阿含に就て」『大正大学々報』第六・七合輯、昭和五年三〇〇—三一二頁(『荻原雲来還曆記念論文集』として再版、山喜房仏書林、昭和四十七年)。
- 7 「漢巴四部四阿含互照錄」(破塵閣書房、昭和四年)、三五一—三五四頁。
- 8 「梵語仏典の諸文献」(平楽寺書店、昭和三十四年)、三三一—三五、一八六頁。
- 9 ad BG I, III, IV (Kat. -Nr. 612-614); E. Waldschmidt: *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*. Teil 1, Wiesbaden, 1965, SS. 270-273 mit Tafel 35. Vgl. a. a. O., Teil 4, 1980, S. 338.
- ad BG II (Kat. -Nr. 1174); L. Sander und E. Waldschmidt, a. a. O., Teil 5, 1985, SS. 168-170 mit Tafeln 70-71.
- 10 第一五八葉表の写真は本注に参照。fol. 158b: Pischel, a. a. O., Tafel VII; fol. 173b: Pischel, a. a. O., Tafel VIII, Waldschmidt, a. a. O., Teil 1. Tafel. 35.
- 11 この中阿含断簡については松田和信・榎本文雄の両氏より存在を知り、資料を提供して下さった。記して感謝いたします。
- 12 森安孝夫「十一世紀後半以降の敦煌文書」(講座敦煌⑥、山口瑞鳳編『敦煌胡語文献』、大東出版社、昭和六十年)、九六頁。
- 13 H. Nakatani: Un fragment xylographique de l'Uṇṇā-sūtra conservé au Musée Guimet. *Bulletin d'études indiennes*, N°4, 1986, pp. 305-319. この論文では、ジュニルの断簡にも言及し、木版刷阿含經の作成年代を十三—十四世紀に置き、その背景のウイグル人についての言及等、有益な示唆に富んでいる。
- 14 実際の表記は「巴」。本注20参照。
- 15 Pischel, a. a. O., S. 818.
- 16 入手にいたるまでの経緯に対しては、Bechert 教授ならびに、松村恒「K. Wille の両氏に深く感謝いたします」。
- 17 本稿では、失われた部分の復元は断簡Ⅱから第一五七葉に続く三箇所にとどめ、残余の箇所と第一五八葉以降の復元は漢訳との対照も含め、別稿に用意している。
- 18 第一五七葉が有する梵文は、チェック体の箇所のみである。最初の pa をジュニルは pa と読むが、コピーによって訂正する。
- 19 トルファン出土の漢訳雜阿含經断簡からも類似的「雜」の字体が見られる。藤枝晃編『高昌残影』(法蔵館、昭和五十三年) Pl. LXIV; A. von Gavalin: *Die Drucke der Turfan Sammlung*, Berlin, 1967, Tafel 3.
- 20 「巴」の表記については、fol. 157, 162-167, 169, 170, 173. 「卷」も正確には「卷」と記され、「巴」はこれを略したもの。

である。

- 21 これはレヴィが正藏經を基準にして計算した結果と一致する。 Cf. Lévi, *op. cit.*, p. 303.

- 22 ここでは紙幅の関係上、これまでの研究が集成されている最近の二論文を挙げる。向井亮「瑜伽師地論 撰事分と『雜阿含經』」『論』所説の〈相応アーカーマ〉の大綱から『雜阿含經』の組織復原案まで 一 附『論』撰事分一『經』対応關係一覽表』『北海道大学文学部紀要』三三ノ二、昭和六十年、横組一四一頁。水野弘元『雜阿含經』の研究と出版』『佛教研究』第十七号、昭和六十三年、横組一四五頁。

- 23 Pischel, a. a. O., S. 810.

- 24 Nakatani, *op. cit.*, p. 306.

- 25 向井亮、前掲論文、一四、二二―二三頁参照。

- 26 榎本文雄「説一切有部系アーカーマの展開―『中阿含』と『雜阿含』をめぐる―」『印度学仏教学研究』第三十二卷第二号、昭和五十三年、横組五一―五四頁。同「阿含經典の成立」『東洋学術研究』第二十三卷第一号、昭和五十九年、九三―一〇八頁。同「東トルキスタン出土梵文阿含の系譜」『華頂短期大学研究紀要』第二十九号、昭和五十九年、一一―二六頁。

- 27 Pischel, a. a. O., S. 810.

- 28 蓮華文様が両面ともほぼ同じ位置に刷られていることは、綴じ穴の目的を持っていたと思われるが、この断簡については本来の目的が失われ形式上の意義を有するに至ったと考えられる。この点については松田和信氏より御意見を寄せられたことを附記する。

- 29 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表

816-821 学 經 AN. 89-85 Sikkha

822-823 涅 槃 經

824-826 学 經

827 耕 磨 經

828 驢 經

829 跋 耆 子 經

830 崩 伽 闍 經

831 戒 經

832 (=817) 三 学 經

833 Pischel, a. a. O., S. 1138. 山田龍城博士の説明とは断簡Ⅲ・Ⅳは「Khaṇḍapāṣāṇīya」と発掘した(前掲書「三四頁」)であるが、断簡Ⅲも断簡Ⅰ・Ⅱ同様 Grünwedel の Idyikutari で購入したものである。

30 Pischel, a. a. O., S. 1138. 山田龍城博士の説明とは断簡Ⅲ・Ⅳは「Khaṇḍapāṣāṇīya」と発掘した(前掲書「三四頁」)であるが、断簡Ⅲも断簡Ⅰ・Ⅱ同様 Grünwedel の Idyikutari で購入したものである。

31 Waldschmidt, a. a. O., Teil 1, S. 271. Ann. 1.

32 下線部分が該当箇所。Bx の行に「つば」なお検討の余地がある。

33 Pischel, a. a. O., S. 1139.

34 Waldschmidt, a. a. O., Teil 1, S. 272.

35 Ed. by N. H. Samtani, (TSWS. Vol. 8), Patna, 1971, p. 28.

36 См.: Г. М. Бонгард-Левин и М. И. Воровцова-Десото-Бекка. Памятники индийской письменности из Центральной Азии. Вып. 1, Москва, 1985, с. 66-76.

37 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表

38 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表

39 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表

40 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表

41 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表

42 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表

43 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表

44 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表

45 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表

46 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表

47 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表

48 断簡Ⅲの梵文 Uddāna と漢訳雜阿含經「パーリ・ニカーヤ (AN.) 対照表